太宰府人物志

資料室だより㉕

◆南浦紹明と趙良弼との交流

遠公　虎溪を出でざるの意
是れ淵明にあらずば誰か賞韻せん
話せんと欲す　箇中の消息の子に
蒲輪何れの日にか雲林に到るやと

（漢詩は原漢文、読み下しは村井章介氏による）。

この漢詩は「蒙古国信使趙宣撫の韻に和す」と題する二首の漢詩のうちのひとつで、作者は南浦紹明です。

「趙宣撫」というのは、文永8（1271）年と10年の2度来日したモンゴルからの使者趙良弼のことです。文永5年より、たびたびモンゴルや高麗から使者が来日し、日本に修好を求めますが、日本側の強硬な態度は変わらず、ついに文永11年、文永の役を迎えることとなります。

作者の南浦紹明（大応国師）は、大宰府崇福寺や姪浜興徳寺の開山となった著名な禅僧で、この漢詩の題より、趙良弼と対面し、漢詩を読み交わしたことが知られます。

外国使と日本側の応接者との間で漢詩の唱和をすることは一般的によく行われることです。そのため応接者は漢詩に精通している必要があり、禅僧がその任を果たすことは多かったようです。南浦も中国への留学経験があり、応接者としては適任であったと思われます。

なお、この漢詩の最初の2句は、有名な「虎溪三笑」の故事をふまえています。東晋の僧慧遠は廬山に居をかまえて三十余年、決して外界との境界となる虎溪を渡ることはありませんでした。しかし、ある時、陶淵明と陸修静を見送った際、話に夢中になって思わず虎溪を越えてしまい、三人で大いに笑い合ったというのです。

つまりここで南浦は、趙良弼が来日後宿舎から出ないで日々過ごしていることを虎溪を出なかった慧遠に喩え、自身を慧遠に虎溪を越えさせた陶淵明に喩え、宿舎に閉じこもってないで、私の寺に遊びにきていただいて、大いに道について語り合いましょうと誘っている内容と考えられます。

なお、もう一首の漢詩からは南浦と趙良弼が非常に親密に交わったことをうかがえます。モンゴル襲来を間近にひかえた緊張した国際関係の中で、心温まる交流といえましょう。

市史資料室　朱雀　信城